

Eternal Star 2

綾瀬麻結

目次

Eternal Star 2	5
ファーストピアス	311

Eternal Star 2

第一章 恋愛経験のなよ

——四月。

秘書業務三年目。今まで先輩秘書たちの雑用を主にしてきた鈴木千佳も、やっと新しい仕事を任せてもらえるようになった。千佳の勤め先でもある水嶋グループの御曹司の一人水嶋優貴との恋も順調で、充実した日々を送っている。

こんなに幸せだと罰が当たってしまうかもしれない……

この日も、千佳は口元に笑みを浮かべながら、ファイルをしつかりと胸に抱えて廊下を颯爽と歩いていた。

その時だった。

「あの、す、鈴木さん！」

突然、誰かが千佳の名前を呼んだ。すぐに歩みを止めて、ゆっくりと後ろを振り返る。「はい？」

こちらを真っ直ぐに見つめてくる男性に、千佳は違和感を覚えた。もちろん彼の強い

視線も気になるが、それよりも彼のスーツに目がいく。変な服装をしているのではない。スーツのサイズは合っているものものどこかしっくりしておらず、無理やり着ているように見えるのだ。

だが、毎年この季節になるとそう感じる男性は何十人もいる。つまり、彼は今年の新入社員の一人なのだろう。

（えっ、新入社員？ わたし、秘書室の新入社員しか面識がないんだけど……）

顔にその気持ちが出てしまったのか、目の前の彼が急に慌て出し、怪しい人間ではないと告げるように手を前に差し出す。

「すみません！ 突然声をかけて。秘書課の鈴木さん、ですよ？ 新入社員研修に来られていた」

千佳は、驚愕しながら目の前の男性を見上げた。

「あなたは、あそこに出席していたわたしを覚えているの？」

「はい！」

彼は、嬉しそうに口元を緩めて手を下ろした。

まだ学生気分が抜けていない無邪気な笑顔を向けるその男性に、何故か千佳の胸がトクントクンと高鳴り始めた。

こんな風に……面識のない男性から声をかけられるなんて今までになかったからだろ

うか？

「鈴木さんは俺のことを知らないと思うけど、秘書課代表として壇上で説明してくれた時、俺は……」

彼が言葉を読ませた時、千佳の小さな乳房の下で突然携帯が震えた。その振動にハッと、すぐに携帯を取る。

「ちよっとごめんさい。……はい、秘書室、鈴木です」

電話の相手は、経理課の前原季実子まえはらきみこだった。

『わたし、前原だけど……鈴木さんが言ったのよね？ 秘書課の出張費精算書を持ってくるって。来ないんだったら、もう金庫閉めるわよ』

「本当にすみません。今すぐに伺いますから！」

経理課へ行くのをすっかり忘れていた千佳は、わざわざ連絡してくれた前原に感謝した。すぐに頭の中でこれからのスケジュールを組み立て直すと、もう一度御礼を言って通話を切る。

千佳は、目の前で肩を落とす男性を申し訳なさそうに見つめた。

「ごめんさい、わたしもう行かないと。えっと……」

千佳は、男性の胸元にある社員証に視線を落とした。

「茂庭慎太郎、二十二歳です。システム開発部技術課に配属されました！」

その情報を頭にインプットすると、千佳は軽く頷いた。

「それでは、また……」

茂庭に軽く会釈をするとファイルを抱え直し、急いで経理課へ行くためにその場を去ろうとした。

「待って！」

その声と同時に、胸の前で交差している手首を強く掴まれた。

「えっ!？」

突然の茂庭の行動に、千佳はビックリした。

「あっ！ すみません！」

茂庭が急いで手を離す。千佳は、落としたそうになったファイルをもう一度胸に抱え直した。面を上げると、茂庭がさらに千佳の側へ近づくように一歩前へ進む。その行動に再度ビックリすると、千佳はすぐに彼の顔へ視線を向けた。

「……あの?」

「鈴木さん！ 仕事が終わるのは何時ですか？ お時間があれば、俺と少し付き合ってもらえませんか？」

「えっ!?! ……あの、」

（これはいったいどういう意味なの？ 付き合うって？ どうしてわたしが彼と?）

千佳が戸惑った表情を見せたからか、茂庭は距離を取るように後ろに一歩下がった。「すみません、急に。このあとが駄目なら、明日のお昼一緒に食べてくれませんか？鈴木さん、どうかお願いします！」

「……わかりました」

何故か、千佳は自然とそう答えていた。

承諾してもらえると思っていたのだから、茂庭は千佳の返事を聞いて一瞬で表情を変えた。まるで子供がプレゼントをもらった時のように、彼は満面の笑みを浮かべている。その笑顔に、千佳は思わず吹き出してしまった。

「……い、急いではと足を止めさせてしまっただけですすみませんでした」

樂しそうに笑う千佳を、茂庭が優しく見つめてくる。

「いえ、そんな」

無邪気に笑っていたことが急に恥ずかしくなり、千佳はそっと目を伏せた。

「明日、こちらからご連絡します。実は、本社勤務に決まっただけから、すぐデータベースにアクセスして鈴木さんのことを探したんです。あつ、個人データではないですよ！っていうか、アレは人事課が保管しているから簡単に見られるものではないし。俺が言ったのは、全社員が閲覧できる名前と所属と会社から支給されている携帯の番号が書かれたデータで。あつ、すみません！詳しく話さなくてもわかっていますよね？」

茂庭は、照れ臭そうに襟足を手で搔いた。

そんな彼の姿を見ているだけで、自然と頬が染まっていく。何と表現したらいいのかわからない感情が、千佳の中でどんどん芽生え始めた。

（これは、何？ わたし、どうしたっていうの？）

「それじゃ、また明日！ 早く経理課へ行ってくださいね」

優しく微笑むと、彼は足取り軽く去っていった。残された千佳は、いつの間にかファイルを強く胸の前で抱きしめていた。

しばらくその場で立ち尽くしていたが、千佳は我に返ると急いで経理課へ向かった。

「鈴木さん！ すぐに来るって言ったでしょ？ わたしは秘書課でのあなたの立場を知っているからいつも……ああ、もういい！」

経理課の前原が、立っている千佳を鋭く睨みつける。

「……本当にすみませんでした」

千佳は、先輩秘書から預かってきた出張費精算書をそっと前原に差し出した。彼女は、それを引いたくするようにして受け取る。

「はあく。鈴木さんを怒りたくはないんだけど、出納を預かってるわたしの身にもなつてよ。秘書課の出張費は幹部クラスと同じで桁外れな数字なんだから」

「すみません」

千佳は目を伏せ、いつも助けてくれる前原に素直に謝った。

「私服族の中でも、鈴木さんとは仕事がやりやすいけれど、現状に満足していたらダメよ。……ちよっと！」

「えっ？」

千佳は、急いで前原に視線を向けた。

「怒ってるわたしが顔を赤くするのはわかるけど、どうしてあなたが頬を染めてるの！」

「えっ？」

千佳は、思わず両頬を手で覆った。

(嘘。わたし……頬を染めてるの?)

「は、走ってきたから、でしょうか？」

「……それにしても、息が上がってないわね」

千佳は前原の鋭い追及に、妙に心臓がドキドキしてきた。

「そういえば、……そうですね」

(わたし、本当にいったいどうしちゃったの!?)

掌よりは温度が低い手の甲を頬に当てて、火照りを冷まそうとした。

「何か、怪しいわね」

前原の瞳が、何かを探るようにキラッと光る。

だが、そんな目を向けられても千佳は何も答えられなかった。自分でも、この感情が何を意味するのか全く理解できなかった。そのため、いつの間にかその理由を考えるように眉間に皺を寄せていた。

戸惑った千佳の表情に興味を失ったのか、前原は千佳から書類へと視線を移した。

「まっ、わたしには関係ないからいいけど。……はい、コレ。先に連絡をしてくる努力は認めるけれど、金庫を開めるまでに来るのが礼儀よ」

「はい」

千佳に現金と精算完了証書の金額を確認させてから、前原はそれらを封筒に入れた。封印を押されたその封筒を受け取ると、千佳は安堵のため息をついた。

「さあ、あの威張りちらした『魔法の住む巣』へ戻りなさい」

前原の言う『魔法の住む巣』とは、秘書室を指していた。千佳は苦笑いを浮かべ、お礼を言って経理課を後にした。

秘書室へ戻るためにエレベーターホールでボタンを押したあと、千佳は無意識に胸元にある携帯を握った。

(あの人、茂庭さんはどうしてわたしのことを調べたの? どうして会って話がしたいの? 新入社員研修でわたしは何か失敗した?)

そんなことはない。桜田と一緒だったから失敗なんてしなかった。

千佳は、茂庭の顔を思い浮かべた。

太い眉の下には二重の瞳、鼻は鷲鼻。その下の唇は厚かったが、綺麗な輪郭をしていて。短く刈り込んだ髪は、大学時代にスポーツをしていた名残だろうか？ 強靱というほどでもないが、細くもない体躯。優貴とは、また違ったタイプの男性だ。

普段あまり表情を変えない優貴と違って、茂庭の表情はクルクルと変化し、裏表のない人のように見えた。身構える必要なんて全くない男性。

優しく接してくれたから、千佳も安心して素直に笑うことができた。あんな男性、初めてかもしれない。

「あっ！」

千佳は、一瞬で顔が真っ赤になった。

（これって、あの時の……初めて御曹司に声をかけられた時の気持ちと似てる！ 心臓がドキドキした時と）

もちろん、優貴の兄である御曹司に抱いたような甘い感情を、茂庭に抱いたわけではない。それでも、彼と話したあと、妙に軀が火照り出したのは事実だった。

エレベーターのドアが開く。エレベーターには何人かの社員が乗っていた。彼らに顔を見られないように素早く俯き、赤くなった顔を隠した。

（わたし、本当にどうしてしまったの？）

ベッドサイドにあるアンティークランプだけが灯った、薄暗い千佳のベッドルーム。その部屋では、シーツが擦れる音、優貴の荒い息遣い、千佳の抑えた喘ぎ声、ぴちゃぴちゃと鳴る淫猥な音が響き渡っていた。

今日、優貴は仕事の付き合いで飲みに行くと言っていた。

少しホッとした気持ちで、今夜のお渡りはないのね」と思いながら千佳がベッドに入ったのは、ほんの数十分前のこと。

しかし、日付が変わってから優貴がいきなり千佳の部屋を訪ねてきた。

明日も仕事がある。いろいろと考えた上で、このまま階上にある自分の家へ戻ってほしいと告げたが、優貴は聞く耳を持たなかった。千佳の頬を両手で包み込み、優しく探るようにキスをした。ほんのりとブランドーの匂いがする。息苦しさから唇を開けると、さらにその味に包まれた。

「千佳……」

ねつとりと絡みつく舌に官能を刺激され、気怠い感覚に包まれそうになった。それでも時間が遅いことから、千佳は両手で突っぱねて優貴から距離を置いた。

「優貴……もう遅いから、」

玄関へ押し返そうとしたのに、優貴はいきなり千佳の足を掬って腕で抱き上げた。

「キヤツ！」

突然のお姫さまだつこに、千佳はびつくりした。

付き合い始めた頃とは違い、最近はコミュニケーションが取れるようになってきた。

優貴なりの優しさに、気付けるようにもなった。

でも、毎回気付けるというものでもない。何故今日に限って千佳を訪ねてきたのか、その気持ちかわからない。優貴は、二十四時を過ぎると絶対に千佳のもとへ訪れようとはしなかったから。

(どうして優貴はこんな風にわたしを求めてくるの?)

ブランドーを飲んできた優貴の瞳には、欲望が渦巻いていた。それを隠そうともせず、優貴は千佳を抱きながらベッドルームに向かう。

「優貴、酔ってるの?」

完全に酔っぱらった優貴と愛し合ったことは、今までに一度もない。だから、千佳は少し不安を覚えて訊ねた。

「いや、酔ってない。グラス一杯では、俺は酔わない」

だが、ベッドに千佳を下ろすと、優貴はいつもと違って荒々しく背広を脱いだ。そのままネクタイを解き、シャツのボタンも外していく。

千佳は、優貴の引き締まった軀に見とれた。

上半身裸になると、優貴は獣が獲物に忍び寄るようにゆっくりとベッドに膝をついた。こちらへ擦り寄りながら、千佳の軀を挟むように両手をつく。

「ゆ、う……きょ」

優貴はルームウェアとして着ている千佳のワンピースの裾に触れ、しなやかな手つきでスカートの中に手を滑らせてきた。

「今夜は優しく千佳を抱きたいんだ……」

そして今、優貴は我が物顔に千佳の軀の至る場所へ手を這わしていた。執拗に小さな乳房を揉みしだいては、齒と舌と唇で敏感に尖った乳首を攻め続ける。

「つう……ん！」

優貴の手から逃れようとするが、しつかり押さえられているので身を振ることしかできない。

優貴が、一つずつ快感のツボを押ししていく。彼だけが知っているその部分を攻められるたびに、千佳の軀は甘い電流に貫かれた。下腹部の奥深いところではうねるような熱

が生まれ、だんだん秘部が濡れていく。

「つあん……」

優貴の指が一本、さらにもう一本褰を掻き分けて膣内に侵入する。千佳は自ら腰を浮かせて、その悦びに反応した。彼自身を連想させる挿入の動きに集中し、突然襲ってくる快感に喘ぎ声を漏らす。優貴の荒い息遣いとくちゅくちゅ鳴る音を聞きながら、その行為に没頭していた。

優貴のリズムで愛されることに馴れた軀は、どうなれば極みへと押し上げられるのか、いつそれが襲ってくるのかもわかっていた。それを求めて勝手に軀が震え出す。

「あつ、はあ……つ、くっ！」

いつもならこのあたりで軽く達することができなのに、理性が一瞬で吹き飛ぶような快感は押し寄せてはこなかった。

優貴が指の挿入をやめると、千佳は大きく息を吐き出して呼吸を整えた。優貴に求められるまま足をさらに大きく開き、大きく漲った優貴自身が潤った秘部に触れる感触を待ち望んだ。まだ挿入されていないのに、そのささやかな触れ合いが胸をドキドキさせる。

「あああ……」

千佳の口から吐息が漏れると、優貴がゆっくりと侵入してきた。そして、滑らかなリズムを刻み始める。千佳はその甘美な痺れに何度も喘ぎ声を漏らし、天高く羽ばたくよ

うに自ら腰を動かし始めた。

優貴に愛されると奔放に応じてしまう。いつもそうだった。

でも、今日は違った。いつもなら、官能の渦に巻き込まれてそのまま間欠泉のように飛翔して果ててしまっただろう。心地よい気怠い感覚に徹睡みながら優貴への愛を胸に抱き、彼に身を寄せてこの幸せを噛み締めていたはず。

なのに、今日の千佳はどこか冷めていた。軀の反応はいつもと全く変わわず、その快感に喘ぎ声を漏らしてもいる。溢れ出るほどの愛液が優貴自身を包み込んでいるというのに、どうしても意識を集中させることができない。

（こんなにも感じていたら、他のことを考える余裕はないはずなのに、わたしの頭の片隅に冷静な自分がいる！）

優貴の愛撫に身を震わせて悶えながらも、何故意識を集中できないのだろう。軀は優貴を求めて懇願しているから、演技しているのではない。口から漏れる悲鳴に似た喘ぎは、作ったものではなく本物。

それなのに、どうして？

優貴の激しい律動がさらに臆興まで進み、ヘッドボードに頭が当たるぐらい突き上げられた。襲ってくる甘い電流で手足が震え、喘ぎ声も絶え間なく口から漏れる。そんな状態なのに、千佳は知らず知らずベッドサイドにあるティッシュケースをジッと見つめ

ていた。

達しそうで達しない状態に耐えていた千佳だったが、その時、突然滑らかな律動が止まった。

「……集中してない、みたいだな」

「えっ?」

千佳は、自分を見下ろしている優貴へ視線を向けた。

「……やめた! まるで、他の女とセックスしてる気分だ」

千佳は、弁解しようと口を開いた。

だが、優貴は屹立した状態のまま腰を引いて身を離し、千佳の隣にドサツと仰向けに倒れた。

「ご、ごめんなさい! わたし、そんなつもりでは……」

千佳の軀は、中途半端な状態で放り出されたために満たされたいと疼いていた。身を起こして、優貴の状態をこの目で見てしまうまでは……

優貴の茂みから屹立する彼自身は、天をつくようにそそり勃っている。刺激を受けたことで充血し、爆発寸前のように赤黒い色に染まっている。さらに、千佳の愛液で濡れて光っているコンドームがピンと張り、破れるのではと思うほど彼自身は怒張っていた。それを見た瞬間、目覚めさせられた自分の欲望よりも、優貴を満足させてあげたいと

いう気持ちが勝った。優貴に愛されたことで乱れた髪も気にせず、千佳は優貴の方へ軀を寄せた。手を伸ばし、小さくキュッと突った黒っぽい乳首に指で触れる。

「っっ……」

優貴の口から、掠れた声が漏れた。

「本当に……ごめんなさい。どうしてなのかわからないの。こんなことって初めてだから」
優貴は腕を上げて千佳の首に巻きつけると、さらに側へ引き寄せた。

「いいさ。俺もいきなり来て襲ったんだから。……千佳がその気になれないのなら仕方ない」

(あれ? 今日は優しい言葉をわたしに言ってくれるの? 何かいいことでもあった?)
汗とお酒とタバコの匂いが混じった体臭を嗅ぎながら、千佳はさらに擦り寄る。

「どうした? いつも千佳らしくないな。気になることでもあるのか?」

お腹を摩りつけてくる漲ったままの優貴自身を感じて、千佳は隠れてそっと微笑んだ。本当、いつもと全然違う。いつもの優貴がこんな状態になったら絶対千佳に襲いかかってくる。欲望を抑えられず、エレベーターの中でも千佳を求めてくるぐらいなのだから

(全てわたしのせい? 優貴の愛撫に身を任せながらも、どこか集中しきれなかったから?)

千佳は優貴の脇腹から腹部へと手を這わし、そのまま下へと滑らせた。優貴が大きく

息を吸い込む音が聞こえたが、そのままさらに下へと突き進む。生い茂った草むらを弄んでから勢いよくそそり勃つ優貴自身を片手で優しく握った。

「千佳っ！」

そつと優貴の胸に顔を寄せ、啄ばむようなキスを繰り返す。髪の毛がさらさらと流れ、彼のお腹を擦るように落ちてても全く気にならない。

優貴の欲望に火を点けようと彼自身の根元に軽く爪を立てると、手探りでコンドームを外してベッドの横にあるゴミ箱に落とした。

抑圧から解放された優貴自身がしなる。硬くて太くて熱く漲った……ピロッドのような感触を持つ優貴自身を握ると、千佳は強弱をつけて手をスライドし始めた。

優貴の苦悶の呻きが耳に届くと同時に、千佳の唇の下で胸板が激しく上下に動く。

「ごめんなさい、優貴。わたし、どうしたのかしら？ 何故今日に限って集中できないのか、本当にわからないの。だから、わたし……」

千佳は謝るように、胸からおへその周辺にキスの雨を降らした。そんな彼女の愛撫を、優貴は止めようとしなかった。千佳の頭に触れ、優貴自らキスしてほしい場所へと促していく。求められるまま唇をさらに下へ下へと移動させ、千佳は優貴の望む場所にキスをした。

その夜、優貴の気分を削いでしまったことを謝るように、千佳は一生懸命唇と手で彼

を愛した。

——翌日。

千佳は、まだ昨夜の出来事が信じられなかった。

どうして、優貴はあれ以上千佳を求めてこなかったのだろうか？ 千佳の手と口であれほど燃え上がったのに、優貴が再びセックスを求めてこなかったのは初めてのことかもしれない。

システム開発部長と先輩秘書を玄関前のロータリーで見送ったあとも、千佳はそのことばかり考えていた。

最近、優貴は本当に変わった。海外で行われた新入社員研修へ突然顔を出したかと思えば、優貴の泊まるデラックスの部屋で一緒に寝ようとかな、プールへ行こうとか言って千佳を誘ってきたりした。さらに、記念になるようなプレゼントまでしてくれたりする。特に、優貴の双子の弟の康貴が結婚してから、とても優しくなったように思えた。

（康貴さんが、妻の亜弥さんに優しく接するのを見たから？ わたしが、それを羨ましそうに眺めていたから？）

「おーい、何ボクッとしてるの？」

肩を強く叩かれ、千佳は飛び上がるくらいびっくりしながら勢いよく後ろを振り向い

た。

「桜田さん！ 凄くビックリしました」

「だって、本当に抜け殻みたいだったんだもの。いったい何回エレベーターを逃したと思っ？」

「えっ？ そうなんですか!？」

目を白黒させる千佳を見て、桜田は笑い出した。

「嘘よ、嘘。わたしだっつと見ていたわけじゃないから。でも、少なくとも一回は逃したわよ」

千佳は苦笑いを浮かべて、再びボタンを押した。

「ねえ、そろそろ……腹を割ってもいい頃じゃない？」

「はい？」

「社内では、わたしが千佳の一番の親友だと思ってたけど？」

しん、ゆう。

千佳は視線を泳がせたが、すぐに下を向いた。親友とは、どれぐらいの間柄を指すものなのかわからなかったのだ。

エレベーターの扉が開くと、二人は他の社員と一緒に乗り込んだ。秘書室がある階を押すと、千佳は黙って、親友、という言葉の意味を考え始めた。

高校時代の千佳には、特別仲の良い友達はいなかった。高校生活は友達を作ることよりも学業を優先していたし、放課後はバイトに明け暮れていた。

当然、その間に親友を作れるはずがない。もし可能だったとしても、千佳にはできなかっただろう。友達との時間を作る心の余裕が全くなかったから。

秘書室のある階でエレベーターが停まると、二人は一緒に降りた。後ろで扉が閉じて二人つきりになったところで、桜田が口を開いた。

「残念！ わたしだけが親友だと思ってたのね。確かに仕事が終わった後食事に行ったり、お互いの家に遊びに行ったりはしてなかったけれど……それは千佳を思っただったんだからね」

「わたし？」

困惑の表情を浮かべる千佳を、桜田が探るように見つめる。

だが、すぐに和やかな微笑みを浮かべた。

「千佳って、心の内を見ることができないのね。それは誰でもそうなんだけど……ちょっと度が過ぎるかも。千佳が踏み出せないのなら、わたしが踏み込むしかないわね」

桜田は千佳の背中をポンッと叩くと、そのまま秘書室へ向かって歩き出した。

千佳は、付き合っている彼が誰なのか、桜田には一切話していなかった。

でも、きつと知っているに違いない。一番の決め手は新人社員研修で優貴が千佳に声

をかけた時だろうが、その前からいろいろと感付かれていたと思う。

例えば、二月に行われた水嶋家の三男の結婚式の時とか……

桜田に全てを話すべきなのかどうか悩みながら、千佳も歩き出した。

秘書室へ入ると、今年の三月から新しい席へと移った桜田が、自分の椅子に腰を下ろしたところだった。千佳も同様に、新しい席に腰を下ろす。

今年は、千佳と桜田が秘書室に配属になって以来、初めて新入社員が入ってきた。新入社員は四人。千佳と桜田に、やっと後輩ができたことになる。後輩といっても大卒者ばかりなので、結局は千佳より年上になる。そのせいか、千佳の方が先輩といっても、彼女たちを先輩として見ることは難しかった。

それに、彼女たちも千佳を先輩とは見ず、見下しているような雰囲気がある。それは、教育係でもある先輩がそういう態度を取っているからだろう。

秘書室での自分の位置というものを、千佳は既に理解していた。そういうドロドロした人間関係に捕われたくない千佳は、後輩たちの態度を気にせずに目の前の資料へと視線を落とした。

「どうぞ」

コーヒークップが千佳の机に置かれる。驚いて顔を上げると、男らしい笑みがそこに

あった。秘書室に配属された新入社員唯一の男性である永長英雄ながおさむひでおだった。

そして新入社員研修の時、「男が秘書になりたいと思うのはいけませんか？」と千佳に質問してきた人物。

「まあ！ こんなこといいのに」

永長は何でもないことのように頭を振るが、素早く同期たちに非難の目を向けるのを忘れなかった。

「あいつら、秘書という仕事を勘違いしている。それに、先輩に対してあの態度！」

「いいのよ。先輩といってもわたしは年下だし。それは、永長さんにも言えることね」

千佳は、永長の腕をポンポンッと叩いた。

「さっ、永長さんは未来の室長に……ううん、それ以上に出世するかもしれないんだから、今から頑張って秘書業務を覚えていってくださいね」

永長の机にある未ファイリングの書類の山を指し、仕事に戻るよう永長を促した。彼が素直に席へ向かうのを微笑ましく見ていたが、千佳もすぐに仕事に戻ろうとペンを手に取る。

その時、マナーモードにしたまま机の上に置いてあった携帯が着信の振動で震えた。手に持っていたペンを置き、千佳はすぐに携帯を取った。

「はい、秘書室の鈴木です」

『鈴木さん？ 俺、茂庭です！ システム開発部技術課の！ ……あの、約束を覚えてますか？』

千佳は、昨日の出来事を一瞬で思い出した。彼がその時に言った言葉どおり電話をしてきたのだとわかると、急に千佳の軀が火照り始めた。

「え、ええ……はい」

『十二時に、正面玄関の外で待ってますから』

「えっ？ 外で？ 社員食堂ではないんですか？」

茂庭と話しながら、千佳はペンを持って意味不明な模様をメモ用紙に書き連ねていた。

『社食では、ちよつと……』

「そう、ですか……」

『俺待ってますから。それではまたあとで』

「あの！」

何を訊きたいのかわからないまま呼び止めたが、既に通話は切れていた。まだドキドキしている鼓動と火照った頬を気しながら、千佳は携帯を置いた。

「誰なのかな〜？」

「えっ！」

隣の席の桜田が、椅子を滑らせて千佳の側へ近寄る。

「電話の相手」

「あの……、システム開発部技術課配属になった茂庭さんって人です」

不思議そうに千佳の言葉に何度も頷くが、桜田はすぐに困惑したように唇を尖らせた。

「で、彼はいったい何の用事だったの？」

「今日のお昼を一緒にする約束していて。あっ！ ごめんなさい、今日は一緒に食べられないです」

「……そう」

ただそれだけ言うと、桜田は椅子に座ったまま床を蹴って自分の席へ戻った。

千佳は、桜田の反応の薄さに小首を傾げた。

(いつもの桜田さんなら、絶対面白い質してくるのに。どうしたのかしら?)

心配するほどのことではないだろうという結論に至ると、千佳は仕事に戻った。

十一時五十分になると、千佳はいつもの余裕がなくなってしまった。

バッグを手に更衣室へ行き、いつもは気にしない口紅を塗り直して髪を整え、鏡に映る自分を見つめた。そこには、頬をほんのりと染めた見慣れぬ女性がいた。

しかも、先程までつけていたオーソドックスな一粒の石のピアスが、今は少し洒落たドロップ型の揺れるタイプに変わっている。

それは出張用として更衣室に置いてあったものだ。わざわざお洒落をする必要はない。わかっているのに、千佳は自然とそれを取り出してつけ替えていた。

どうしてここまで綺麗に装うとするのかわからず、千佳は戸惑いを覚えた。

だが、そのことについて深く考えないように気持ちを切り替えると、千佳は足早に口ビーへ向かった。

このことが発端となり……優貴との間に亀裂が生じることになるなんて、千佳は想像すらしていなかった。

ロビーに下りると、外へ出ようとしている茂庭が目に入った。視線を感じたのか、茂庭がいきなり振り返った。千佳を見つけた瞬間、周囲の目にもせうに破顔し、こちらへ近寄ってこようとすする。その行為を押し止めるように、千佳は慌てて茂庭へと走り寄った。

「すみません、待たせてしまいました?」

窺うように彼を見上げる千佳に、茂庭は嬉しそうに目を輝かせながら頭を振った。

「いいえ。俺が……その、待ちきれなくて」

照れたように俯くその姿が、何故か千佳の胸をときめかせた。

(こんなにドキドキするなんて、わたし本当に変。男の人のこういう姿を初めて見るから?)

茂庭の側にいるだけで心臓が激しく高鳴る。その鼓動を無視するように、千佳は彼のネクタイに視線を落とす。

「時間がないから、早く行きましようか?」

「あわわっ! すみません! では、行きましよう!」

茂庭が社外を指すと千佳は頷き、そのまま二人揃って外へ出た。彼が案内するまま肩を並べて、歩道を進んでいく。数分歩いたあと交差点で曲がり、そのままビルとビルの間にある狭い道路に入った。どこまで歩くのだろうと思っていると、茂庭がすぐ横の商業ビルを指した。

「こっちです」

飲食店の看板が出ているのを横目で確認し、茂庭の後ろから地下へと続く階段を下りた。

のれんをくぐり、店内に入る。時間が少し早いからか、それともあまり知られていないからか、店内はまだ空席が目立った。

「いらっしやいませ! お二人様ですか?」

店員に席まで案内されると、二人はすぐに注文を終えた。店員がテーブルから去った途端、茂庭が背筋を伸ばしてペコリと頭を下げた。

「今日は、俺のためにありがとうございます!」

居たたまれずに思わず視線をテーブルに落としたが、千佳は思い切って顔を上げ、改めて彼を見つめた。

「わたし……こうやってよく知らない人と一緒にご飯を食べるのなんて初めてなんだわ」千佳が初めて男性と二人っきりで食事をした相手は優貴だが、それは出会ってから数ヶ月経ってからだった。

優貴の視線に気付き、ファーストキスを奪われ、何度も誘いを受けるようになって……あの時は承諾するまであんなにも時間をかけたのに、どうして茂庭に対しては一日で食事の誘いを受けてしまったのだろうか？

優貴の目に留まった時の千佳と比べて、今の千佳は心が成長している。そのことに気が付かないまま、千佳は探るように茂庭を見つめ続けた。

千佳の視線に気付いた茂庭は、照れくさそうに笑みを浮かべてネクタイを少し緩めた。「すみません、こんなところまで歩いていただいて。でも、会社の近くでは嫌だったんです」

「いえ……」

「しかも……蕎麦屋なんて。デートらしくありませんよね？」

「えっ！」

（これって……デ、デートなの!? わたしが、茂庭さんと？）

茂庭を意識した途端、千佳の軀がまた火照り出した。彼の言葉にどう答えようか狼狽えていると、注文した蕎麦がテーブルに運ばれてきた。

妙な雰囲気になりそうだった場の空気を断ち切れたことに、千佳は思わずホッとした。茂庭の言葉を聞かなかつたことにすると、千佳は箸を手に持った。

「……わたし、お蕎麦は好きですから」

「そう言ってもらえて、本当に良かった」

茂庭はホッとしたように微笑み、千佳と同じように箸を持った。二人は同時に食べ始めたが、千佳は茂庭に何度もチラチラと視線を向けた。

優貴とは、雰囲気丸つきり違っている。物の考え方や感じ方も、真逆と言っているかもしれない。それに、優貴と一緒にいる時には全く感じない……朗らかな雰囲気が彼から漂ってくる。それが妙に心地いい。

この感じ、高校の同級生で美容師を目指している中里と一緒にいた時と似ているかもしれない。

だが、あの時とは全く違う。千佳の心臓が、こんなにもドキドキしている。

「昨日は詳しく言えなかつたけど、新入社員研修で見かけてから鈴木さんのことばかり考えてしまつて……。あのっ！ 鈴木さんの方が先輩ですが、俺と……付き合ってもらえませんか？」

突然の告白に、千佳は思わず咽むせた。

「大丈夫ですか！」

茂庭の心配そうな声を聞きながら、千佳は水が入ってるグラスに手を伸ばして急いで飲んだ。

「……ゴホッ、だ、大丈夫です」

口を拭ぬぐって視線を上げると、茂庭はホッと安心したように息を吐き出した。

しかし、千佳の返事を聞こうとすぐに背筋を伸ばす。

「俺と付き合うこと、真剣に考えてみてくれませんか？ 少しでもいいからチャンス
を……」

茂庭の強烈な眼差しに、千佳の心は揺れ出した。なぜなら、優貴にはないものを茂庭が持っているからだ。茂庭は相手の気持ちに優先させ、無理強いをしてこない。

優貴とは、男女の関係から始まった。彼は、千佳の気持ちを顧みかえりようとしなかった。

だが、茂庭は違う。付き合っあってほしいと告白し、千佳から良い返事がもらえるのを辛抱強く待っている。

（わたしは……こういう告白を夢見ていた。気持ちをストレートに出し、それでいて通い合うまでジツと耐えてくれるような男性から愛の告白をされるのを）

正直、茂庭の告白は唐突だったが、それでも千佳の心を激しく高鳴らせてくれた。

もし優貴と出会う前、もしくは優貴を愛していると気付く前なら、茂庭にイエスと答えていただろう。自然と茂庭を意識してしまうのだから。

まるで、恋に落ちたように……

（えっ？ 恋？ ……わたしは茂庭さんに、恋しちゃったの？ まさか、そんな！）

ハッと息を呑み目を大きく見開くと、千佳は茂庭に視線を向けた。出会ってまだ二日目なのに、茂庭に恋？ 千佳は、心の中で何度も頭を振った。

（違うわ！ わたしは優貴を愛している。……わたしには優貴がいる！）

「ごめんなさい、わたし、」

慌てて拒否の言葉を口にしようとした。

だが、それを止めるように茂庭が身を乗り出してくる。

「今、返事はしないで！ 頼むよ。少しは、期待させてほしいんだ」

千佳は頭を振った。

「期待しないでほしいの。ごめんなさい……わたし、付き合ってる人がいるから」

その言葉に、茂庭の顔から血の気が失せた。

「そう、なんですか？」

明るく語りかけてくる茂庭の表情を曇らせたのが千佳だと思つと、胸がチクツと痛んだ。

だが、真実を隠しておく方がよっぽど酷い。「その彼って社内の人ですか？ 鈴木さんと付き合ってる幸運な人は、いったい誰なんですか？」

「えっ？ それは……」

千佳は、言葉を濁した。付き合っている彼が、社長の息子である水嶋優貴だと話せるわけがない。さらに、二人の付き合いは社内で噂にならないよう秘密にしているので、簡単に人には言えない。

「もしかして、俺を諦めさせるためについた嘘じゃありませんよね？」

「違うわ！ わたし、嘘なんか……」

「本当に付き合っているのなら、相手が誰なのか教えてください。決して口外はしませんから！」

「言えません。言いたくありません！」

千佳は、絶対口にはしないと伝えるように激しく頭を振った。茂庭は力なく椅子の背に凭れ、下を向いたが、すぐに面を上げて千佳を射貫くように見つめてきた。

「そんな風に言われたら……きつく問い質すことなんかできないじゃないですか。でも、さちんと言ってくれないと、俺は鈴木さんのことを諦められません。俺に諦めてほしくないから彼の名を言わないのだと……思ってしまうですよ？ いいんですか？」

いくら訊ねられても、優貴の名を出すことは決してできない。不用意なことをして、優貴と千佳の間に亀裂を作りたくはなかった。千佳は、力なく立ち上がった。

「もう行きましょう。午後も忙しいですし」

「鈴木さん！」

この押しの強さはどこから出てくるのだろうか？

千佳は不思議に思いながら、あとに続くように立ち上がった茂庭を見上げた。

「茂庭さんの告白は、本当に嬉しかったです。でも……ごめんさい」

「……そんな辛そうな表情しないでください。俺は……そういう顔をさせたくて告白たんじゃないんですから」

千佳は、初めて自分が苦しそうに顔を歪めていることに気付いた。

「ごめんさい」

「最後に一つだけ！ 鈴木さんの彼氏は……社内の人ですか？」

千佳は、ハッと息を呑んだ。

（これぐらいはいいわよね？ わたしの彼が、優貴だとはわからないんだから）

「……はい、そうです」

茂庭の目に強い光が宿ったが、千佳は全く気付かなかった。自分でも理解できない苦しみから逃れるように、一瞬目を瞑って俯いたからだ。

告白を断つたことで気まずい雰囲気の流れるかと思つたが、それは不要な心配だつた。社会経験は確かに千佳の方があつたが、年齢もあまり変わらないからだろう。会社へ戻る道中、茂庭は気さくにいろいろな話をしてくれた。茂庭の話に耳を傾けるうちに肩から余分な力が抜け、千佳は自然と笑みを浮かべていた。

「実家を出ずに素敵な大学生活を過ごせたのはいい思い出だと思うわ。わたしも親元を離れたのは、つい最近のことなの」

「……そうなんだ。少し寂しかったりする？」

「部屋がシーンとしてたら特にな。妹は家族の中でお日様みたいな存在だから、時々その笑い声が懐かしかったり」

千佳は、青い空を見上げた。同時に、ピアスが軽やかに揺れる。

（実佳、元気にしてるかな？ メールでは新しい学校にも馴染んで楽しく過ごしてるって書いてあつたけど、こつちと大阪では違うこともいろいろあるから……きつとわたしには言えない大変な思いもしてるよね？）

「そのピアス……」

「えっ？」

千佳が意識を戻すと、茂庭が手を伸ばしてピアスに触れてきた。

その時、微かだが彼の手が千佳の頬を優しく撫でたような気がした。突然素肌に触れ

られた千佳は、咄嗟に顔を下に向けた。

頬が熱く火照つていく。両手を頬に当てて、その火照りを冷ましたいぐらいだ。

「その……とても似合ってます」

「……あり、がとう」

（しっかりしなさい！ わたしがこんな態度を取っていたら、茂庭さんが変に思つてしまう！）

会社が目前だったので、千佳は突然湧き起こった動揺を振り払うように深呼吸をした。何事もなかったようにポケットから社員証のプレートを出し、首にかける。茂庭も同じように首にかけた。

二人で並びながら表玄関の手前に辿り着いた時、ちょうど黒塗りの車が車道からロータリーに入ってきた。周囲にいた社員たちの視線は、自ずとそちらへ向く。千佳も同様に、車から出てくる人物へと視線を向けた。

助手席のドアが開くと、先輩秘書が現れた。彼女がドアを閉めると同時に後部座席のドアが開き、まだ若い男性が出てきた。

その人が誰だかわかると、千佳はハッと息を呑んだ。同時に足がガクガク震え出し、その場から動けなくなつてしまった。

ドアを両手で支えて車から降りる人物を待っているのは、いつも優貴に付き従うアシ

スタントの柳原。彼がそこにいるということは、つまり優貴が車に乗っているということになる。

いつもの千佳なら、優貴を見ただけで過剰に狼狽えたりしない。

だが、優貴とは違う男性と二人っきりで食事をしてしまったことで、千佳は妙な後ろめたさを感じていた。さらに、茂庭から告白されたことも重なって、やましい気持ちも抱き始めている。

「さすが経営本部の人は違うね。……鈴木さん？」

千佳が何も答えないので不思議に思ったのだろう。千佳の顔を覗き込むように、茂庭が顔を寄せてくる。

その時、優貴が車から出てきた。

優貴は柳原に軽く頷き、その後ろにいる秘書から鞆を受け取る。千佳に背を向ける形で社内に入ろうとしていた優貴だったが、その瞬間、動きを止めて勢いよく振り返った。千佳に見られていると気付いたのだろうか？

優貴の視線に射貫かれたその時、茂庭がいきなり千佳の頬に触れてきた。

「どうかした？ 何か怖いものでも見た？」

一部始終を見ていた優貴が、一瞬で顔を強ばらせる。優貴の気持ちだが、千佳には手に取るようにわかった。優貴は、千佳がこんな風に他の男性に触れられるのをとても嫌っ

てる。自分だけを見つめてほしいと、いつも強く願っている。

(自分の兄弟にすら嫉妬するぐらいなのよ？) なのに、わたしが他の男性と一緒にいて、簡単に肌を触られているのを見たら……どんなことになるか！)

「や、やめて……」

茂庭の手を振り払おうとすると、彼はその手を下ろして千佳の二の腕を強く掴んだ。

「鈴木さん？ いったいどうしたんだ？」

茂庭が話しかけているのに、千佳は優貴から目を逸らすことができなかった。どんなに優貴の目が細められ顎が強ばっていくのが見て取れるのに、どうして彼から目を逸らせるだろうか。

これ以上優貴を怒らせないために、必死になって茂庭の手を振り払おうとするが、彼はさらに強く握り締めて放そうとしない。

過去の経験から、優貴が千佳へ近寄り、何らかの口実を使って優貴のもとに来るように言うだろうと思った。そうなると、確信していたと言っている。

でも、優貴は千佳の方へ来ようとしなかった。何かを告げるような視線を投げてることも一切しなかった。ただ、そこには誰もいないというように……千佳の存在を無視した。真っ直ぐ前だけを向いて、ガラスドアの内側へと消えていった。

(嘘……どうして？ どうしてわたしに何も言わないの？ 優貴！)

今まで、会社では仕事上の付き合いにしたい」と口を酸っぱくして優貴に言っていた。だから、本当なら無視をされてホッとすることはしないのに、今は全然嬉しくない。それどころか、優貴の心が一瞬で千佳から離れたとわかってしまった。鋭い爪で胸を抉られたような痛みが、千佳を襲う。

千佳は人目も憚らずに泣きそうになったが、顔をギョッと閉じてその思いを抑え込んだ。

過去には、仕事を隠れ蓑にして何度も呼び出されたことがある。だから今回も、あの冷酷な怒りが瞳に宿った時に、何かが起こると思った。

それなのに、どうして今回に限って何も無いのだろうか？

優貴に冷たく無視された事実には、どう対処していいのか全くわからない。

「どうかした？」

茂庭が話しかけてくると同時に我に返り、千佳は勢いよく彼の手を振り払った。

「あっ、ごめん。でも役員の前であまり騒がない方がいいと思って、」

「ごめんなさい。わたし……もう戻らないと」

千佳を止めようとする茂庭の手から逃れるように、優貴の後を追って走り出した。ロビーにいる社員を掻き分けてエレベーターホールへ向かうと、ちょうど優貴がエレベーターに乗ったところだった。

優貴を呼び止めることはできないが、こちらを向いて何か言ってくれるかもしれない。その希望に絶ったが、振り返ってこちらを見つめる優貴の冷たい瞳を見て、千佳はその場に凍りついた。

その瞳に、既に怒りは宿っていない。宿っていたのは、今まで見たことのない……蔑みに満ちた黒い闇。

「ち、違うの……」

千佳の震える唇から、掠れた声が漏れる。エレベーター内にもエレベーターホールにも社員が数人いるのに、千佳は優貴に向かって訴えるように頭を振った。

だが、優貴は何も言わず、目の前で取り乱す千佳を興味なさそうに見返すだけ。優貴が何も行動しないとわかると、柳原が操作パネルに手を伸ばした。閉ボタンを押したのだろう。エレベーターの扉は、まるで二人の絆を断ち切るように容赦なく閉まった。

胸が張り裂けそうな痛みが襲ってくる。千佳は、どうにかなりそうだった。

他のエレベーターが来ても、千佳は乗ろうとはせずその場にずっと立ち尽くしていた。完全に優貴から距離を置かれたのだとわかると、千佳の掌が異様に汗ばみ出した。同時に、指先がどんどん冷たくなり、自分でも抑えきれない震えが襲ってくる。

（わたし、いったいどうしたらいいの？ どうしたら！）

そんな千佳の後ろ姿を茂庭が遠くから眺めていたが、もちろんそのことに気付くこと

はなかった。

その日の午後をどう過ごしたのか、千佳はあまり覚えていなかった。

だが、優貴から電話がかかってくると信じて、携帯だけは目の前に置いて仕事をしていたことは覚えている。上司から咎められなかったということは、仕事だけはきちんとしていたのだろう。

千佳は何度も携帯を手にとって連絡を取ろうとしたが、電話をかけて無言で切られたらと思うと恐怖が湧き起こり、結局はボタンを押すことができなかった……

千佳の望みは叶わず、その日、優貴からの連絡は一度もなかった。

残業を一時間だけすると、千佳は寄り道もせず真っ直ぐ家へ戻った。バッグを部屋に置くときキッチンへ行き、実家から送られてきた野菜を取り出す。旬の食材である筍料理を作るために、包丁を握り締めた。時計の秒針が動く小さな音だけが、静かな部屋に響く。「痛っ！」

ポタポタッと俎板まなこに血が落ちる。千佳はすぐに包丁を投げ棄て、キッチンペーパーを引つ張り出して指に当てた。料理は得意な方ではないが、こんな失態は初めてだった。玉ねぎを刻んでる時に、まさか中指の第一関節周辺の皮膚を包丁でざっくりやってしまふとは。

心ここにあらず……だから、こんな怪我をしてしまうのだろう。

「もう！」

自分自身にイライラしながら、千佳はキッチンペーパーをゴミ箱に放り投げた。再び血が溢れ出してくるのを見ているだけで、自然と千佳の目にも涙が浮かんでくる。

水道のレバーを上げて水を出すと、千佳は唇を噛み締め、涙を堪えながら傷口を洗った。そんなに深い傷ではないが、血が止まらない。

もう一度キッチンペーパーで傷口を押さえてから、救急箱を取り出した。常備してある消毒液で傷を綺麗にし、化膿止めの粉を振りかけてから絆創膏を貼る。さらに料理に雑菌が入らないよう、絆創膏の上からゴム製のサックを填めた。

チラツと時計を見ると、十九時三十分だった。これから起こることを考えると、恐怖が込み上げてくる。

でも、その気持ちに負けてはいけないという思いで奮起し、千佳は再びキッチンへ向かって料理の支度を始めた。

この時間になっても、優貴からの電話は一度もなかった。

でも、もしかしたら今夜部屋に寄ってくれるかもしれない……

千佳は指の痛みにも構わず、優貴が美味しいと言ってくれる料理を作るために手を動かした。

ふんだんに筍を使つた春巻き、白和え、筍ご飯、筍ステーキの下ごしらえを終え、千佳特製の玉ねぎソースも器に入れた。

ビールを飲みながらも、自然と箸が進む料理になつただろう。食が進めばその場が和み、少しはリラックスをして話ができるに違いない。

一通り準備が整うと、千佳はホッと息をついた。優貴が来たら、春巻きを揚げて筍をバター醬油で焼けばいい。お味噌汁も、味噌を溶かせば食卓に並べられる。

優貴の訪問を待つためにキッチン椅子に座ると、千佳は肘をテーブルについて両手で頭を支えた。再び、部屋が静まり返り、秒針の音だけが響く。

(来る……優貴は絶対わたしに会いに来てくれる。怒ってでもいい。わたしをなじつてもいいから、お願い……わたしに会いに来て！)

優貴が来てくれると信じながら、千佳はひたすら待つていた。

テーブルに、涙がポタポタと零れ落ちる。時計の針は、もう二十三時三十分を指していた。

(来ない……優貴は来ないんだわ。最後にわたしを見たあの瞳……蔑みがそれを語ってる！)

「……っ！」

千佳は涙を堪えきれず、とうとうテーブルに突つ伏して泣き崩れた。

なんてバカなことをしたのだろう！ 茂庭の誘いが何を意味しているのか、本当にわからなかった？ 初めて男性から声をかけられたから、浮かれてしまった？

優貴の兄を好きになつた時と似た感覚だったが、彼は雲の上の人だった。だから、気持ちはまだ安定していた。

だが、今回は同世代の茂庭から告白されたということもあり、千佳は妙に昂揚してしまつた。

(こんな気持ち初めてだった……。だから、わたしは恋に恋するようなバカな感情を抱いてしまつた)

今ならはつきりとわかる。千佳は自分の感情に溺れていた。男性に免疫がないから、自分の感情に振り回されてしまったのだと。

(優貴か茂庭さん、どちらかを選べと問われれば、わたしは絶対に優貴を選ぶのに！) にもかかわらず、千佳は優貴を怒らせるような真似をしてしまった。怒っているだけならまだいいが、今回はいつもと全く違う。

ゆっくりと身を起こすと、溢れ出た涙が頬を伝って再びテーブルへと落ちる。

もう嫌われてしまったのだろうか？ 優貴が千佳に怒りをぶつけてこないのは、もう女性として興味がなくなつたから？

千佳は、椅子から勢いよく立ち上がった。
 (何もしないで諦めたくない。わたしから行動するのよ！ 誤解だとしても、優貴を傷つけたわたしが謝るべきなのだから。罵られても怒りをぶつけられても、優貴を取り戻せるのなら……わたしは何でもする！)

千佳は洗面所に行つて顔を洗い、涙の痕跡を拭うと薄く化粧をした。躊躇うこともなく部屋の電気を全て消し、鍵を持って外に出た。
 このマンションの最上階に住む、優貴のもとへ行くために……

千佳は、優貴の部屋のチャイムを押した。

不思議なことに、今の自分の心境は、上司から呼び出しを受けた時と似ていると思つてしまった。仕事で失敗して、何を言われるのかとビクビクしながら上司の前で佇んでいる時と。

だが、これは違う。上司に怒られてそれで終わり……という問題ではない。

千佳は、歯を食い縛つてドアが開くのを待っていたが、それはビクリとも動かない。ドアの向こうから人が歩いてくる音さえもしない。

どうして？ この時間なら、絶対部屋にいるはずなのに。
 願いを込めて、千佳はもう一度チャイムを押した。

(お願い優貴。ここを開けて……わたしを迎え入れて！)

それでも、その願いは叶わなかった。千佳はドアに額を付けて、優貴から拒まれている事実を受け止めようとした。

だが、そんな風に簡単に受け止められるものでもない。こういうことは初めてなので、どういう態度を取ればいいのかも全くわからない。

(わたしは、優貴以外の男性と付き合つたこともなければ、駆け引きさえしたことがないから)

それでも、今回は全て千佳が悪かつたということとはわかつてる。

これが逆の立場だつたらどう思うだろうか？ 優貴が他の女性に……その人が未来の奥さんだとしても、親しそうに触れられていたら？

その場面を見た瞬間、絶対に千佳は打ちのめされていただろう。

(どうして考えられなかったの？ 自分がされて嫌なことは、しない主義ではなかったの？)

これも、全て千佳に恋愛経験がないせい……

我慢できずに手を上げ、千佳は固く閉ざされたドアを拳で三回続けて叩いた。

「優貴、お願い……開けて」

再び拳を作つて、三度ドアを叩く。深夜ということもあり近所迷惑になることも考え

だが、最上階のこのフロアは戸数が少ない。さらに、水嶋兄弟が所有する部屋が隣接しているの、それほど近所に音は響かないだろう。

千佳は、もう一度強くドアを叩いた。

「ゆう、きい……」

絶望したような悲痛な声が、千佳の口から漏れる。

その時、鍵が開く音がした。千佳はすぐに身を起こして一歩後ろに退いた。目の前のドアがゆっくりと開く。

そこには、優貴がいた。もうベッドに入っていたのだろうか？ 素肌の上にシャツを無造作に引っかけ、今穿きましたとわかる、ファスナーを半分上げただけのズボン姿。シャツの前が開いてるために、鍛えられた胸筋と濃い色をした乳首がはっきりと見とれる。

千佳は、その男らしい姿勢から目を逸らすことができなくなり、思わず生唾を呑み込んだ。女として、瞬時に反応してしまったのだ。

だが、アルコール臭が鼻を突き、自然と優貴の顔へ視線を向けた。
ボサボサに乱れた髪は、全く優貴らしくない。既に生え出した不精髭のせいで、頬が瘦けたように見える。そんな姿を見て、千佳は心臓を強く圧迫されたような痛みを覚えた。
「ゆう、き……」

「何をしにきた？」

何の感情もない声音。細めた瞳で冷酷に千佳を見つめているが、優貴が歯を強く食い縛っていることが千佳にはわかった。露になった喉の脈が、ピクピクと激しく動いている。

そんな姿を見て、千佳の目の前にいるのはいつもの優貴だとわかった。冷静な仮面を被ってはいいても、いつものように激しい感情が心の中で渦巻いているのだろう。

優貴と出会った頃は、そんな彼が怖かった。

だが、どうしてそういう状態になるのか、今は多少なりともわかっているつもりだ。

心臓の鼓動が優貴にも聞こえるのではないか……というぐらい胸が高鳴っていたが、千佳は怯まず彼に向かって一歩足を踏み出した。

「優貴、お願い……話したいの」

「……話すことなんか、何もない！」

冷酷な光が銃弾のように千佳を撃つ。それでも千佳は諦めなかった。ここで諦めてしまったら、二人の関係が危うい方向へ進んでいく。それだけは絶対に避けたかった。もし、このまま優貴と別れるようなことになれば、立ち直れなくなってしまう。

それほど、千佳は優貴だけを愛していた。

「……優貴は何も話さなくていい。わたしの話を、聞いてくれるだけでいいから」
優貴は苛立ったように顔を背け、投げやりなため息を強く吐き出した。

「わからないのか？ お前がそう言うだけで……、つくしように！」

優貴は千佳の二の腕を強く掴むと、玄関に引き入れた。

「キヤッ！」

凄い力に思わず叫び声を上げたが、千佳は抗うことはしなかった。優貴が千佳を壁に叩きつけるように押しつけても、それを受け入れた。強い衝撃が背中から軀へと伝わり、痛みで一瞬^{まひた}瞼を閉じたが、すぐに目を開けて優貴を見上げる。

その瞬間、優貴が千佳の顎を片手で掴み、斜め上から覆い被さってきた。力で押さえつけようとするそのキスは、二人の歯がぶつかるほど強かった。それでも、千佳は抵抗しなかった。優貴の怒りを、この身で全て受けとめようと思った。

何度も何度も強く吸われ、唇がピリピリして痛い。最初にキスをされた時に口内が傷ついたのか、血の味がした。唇は内出血をおこしそうだったが、千佳は優貴のシャツを握り、そのキスを無条件に受け入れた。それどころか応えようとさえ思った。

だが、口を開いて受け入れようとすると、優貴はいきなり乱暴なキスをやめた。

「帰れ……」

優貴は千佳から離れて、しつかりとシャツを掴んでいる千佳の手までも振り払った。優貴の拒絶を受け入れられない千佳は、激しく頭を振る。

「イヤ、帰らない！」

「今のでわからないのか？ 俺は、何をするかわからないんだぞ！」

まるで心の傷が目に見えるのを恐れるように、優貴が瞼をギュッと閉じた。そんな優貴を、このまま置いて去っていきけるわけがない。

千佳は、このあと何が起ころうと構わなかった。ただ、優貴の側において許しを請いたかった。たとえ許してくれなくても、愚かな振る舞いをしてしまった未熟な千佳に怒りをぶつけてほしい。

優貴の怒りをこの身に受ける覚悟は、もうできている。優貴の側にいられるのなら、何でもするつもりだった。

「わたし……優貴になら、何をされても構わない」

優貴はカッと目を見開き、千佳を鋭い視線で見下ろした。その瞳には、鬱積された感情が宿っている。

「……後悔しても知らないぞ」

優貴は千佳の手首を強く掴むと、引きずるように室内へ引っ張った。転びそうになっても手首から肩へ痛みが走っても、千佳は優貴の強ばった背中を見ながら言わずにいられた。後悔なんて絶対しない！ 本当よ！」

この時の気持ちに嘘偽りは全くなかった。千佳は、本当にそう思っていた。後悔はし

ない」と確信を持っていた。

優貴が千佳の手首を掴んで、どんどん廊下を進んでいく。

その手が異様に火照^{ほて}っているのが、千佳にも感じ取れた。優貴は怒りだけでなく鬱積^{うつせき}した欲望も抱いていて、それを発散できないことにイライラしている。

優貴が求めるのなら、軀^{からだ}を開く心構えはできていた。優貴が手を伸ばしてくるのを従順に受け入れることは、心から愛していると伝える方法でもあるから……

リビングへと続くドアを優貴が開けると、見慣れた豪華な応接セットが目飛び込んできた。ウイスキーのボトルが三本と飲みかけのグラスがローテーブルに置かれている。千佳は、前だけを真っ直ぐ見る優貴の横顔を見上げた。

優貴は自分で自分をコントロールし、お酒を飲む量も毎回きちんと決めている。弟の康貴の結婚式でも、披露宴で飲み過ぎたと言ってその夜はお酒を口にしなかった。

その優貴が、これほどお酒の力を借りようとしているなんて……

（ここで、わたしは優貴に抱かれるのね……）
革張りのソファに視線を落としたが、優貴は千佳をさらに引っ張ってリビングの奥にある階段へ向かった。

「えっ？」

優貴は、そのまま主寝室へと続く階段を上がる。

正直、千佳は優貴のベッドで愛されることはないと思っていた。以前のように、千佳を優しく階上へ導いてくれるような心境ではないと思ったから。

だから、リビングで優貴の欲望を受け止めると思っていたのに、それは全くの誤解だった。乱暴な仕草でありながらも、優貴は千佳をベッドルームへ誘^{いざな}ってくれた。優貴の心に、まだ千佳を思いやる気持ちが残っていると感じた途端、不安だった心に光が射し込んできた。

（わたしを抱くことで、優貴の荒ぶる気持ちが少しでも落ち着いたら……きちんと話をしよう）

大丈夫、優貴はきちんと耳を傾けてくれる。今年に入ってからいつもそうしてくれたように……

ドアを開けて主寝室へ入った瞬間、優貴は千佳をベッドの方へ思い切り押し出した。

「キヤッ！」

体勢を整えることもできないまま千佳の軀は前のめりになり、柔らかなベッドへ俯^{うつぶ}せに倒れ込んだ。スプリングが効いているので、軀に痛みが走るような衝撃は一切感じなかった。

だが、その乱暴な行為に千佳は驚愕せずにはいられなかった。無理やり求められても

それを受け入れる覚悟はできていたが、ここまで乱暴な扱いをされるとは思わなかったからだ。

ベッドに手をつけて勢いよく後ろを振り返ると、優貴は既にシャツとズボンを脱ぎ去って裸になっていた。

優貴は、千佳を射貫くように見下ろしていた。見事な胸筋から割れた腹筋へ、さらに濃い茂みへと視線を落とすと、準備は整っていると一言わんばかりに優貴自身は怒張っていた。いつもと角度が違うのではと思ってしまうほど、それは天をつくように漲っている。さらに、ナイトテーブルのスタンドの光が当たることによって陰影ができ、いつもより大きく太く見えた。先端部分が濡れて光っているのも、はつきりと見て取れる。

千佳は、唾をゴクリと呑み込んだ。

この状況に恐怖を抱いたものの、見事な体躯を隠そうともせず堂々と佇んでいるその姿に、千佳は思わず見とれてしまった。男神を思わせるその姿態は、千佳の心に潜む女を刺激してくる。

もちろん、男神をこの目で見たことは一度もない。男の裸をこの目でじっくりと見たのも、優貴唯一人だけ。それでも、男神とはきつと優貴のような体躯と強い意志を持つた神だろうと思った。

千佳がそんな風に考えていると、突然優貴がベッドに膝をついた。まるで血肉に飢えた獣のように四つん這いになって近寄ってくる。

動くたびに波打つ筋肉に自然と目が吸い寄せられたが、千佳のブラウスの胸元を優貴が乱暴に掴み、力任せに引っ張ったことで一瞬にして均衡が崩れた。ブラウスのボタンが、四方八方に弾け飛ぶ。その荒々しい行為に、千佳は大きく目を見開いた。

優貴の動作は、まるで飢えた獣そのものだった。千佳は何か言葉を発しようとしたが、声を出せなかった。喉の筋肉はただ上下に動くだけで、舌は痺れたように上手く動かない。ブラジャーをつけていない乳房が露になり、冷たい外気に触れたことで乳首がキュツと硬くなった。

いつもの優貴なら、欲望に支配されていても優しく千佳の肌に触れただろう。だが、今の優貴にはその優しさが全く備わっていないかった。行為だけを目的としているのか、素早く千佳のスカートの中に手を入れ、乱暴にパンティを下ろした。さらに、千佳を転がして腹這いにさせると、両手首を頭上に上げさせて片手で固定するように掴んだ。

千佳は、シーツに頬をつけながら瞼をギュツと閉じた。優貴の真意を推し量ろうとしたが、上手く考えが纏まらない。こんなことは初めてだった。

「あっ！」

優貴にお腹を引き上げられたかと思うと、そこに柔らかい枕を押し込まれた。その格